

小・中学校国語教科書における「随筆を書くこと」教材の検討 — 令和2・3年度改訂を観点として —

A Study of Teaching Materials for “Writing Essays” in Japanese Language
Textbooks for Elementary and Junior High Schools
— From the perspective of the 2020 and 2021 revisions —

河 野 智 文

Tomofumi KAWANO

国語教育ユニット

(令和3年9月30日受付, 令和3年12月23日受理)

1 問題設定

「随筆を書く」学習活動は, 学習指導要領の国語科「書くこと」の言語活動例として, 『小学校学習指導要領』(平成20年3月)に設定され, 平成29年3月告示の学習指導要領では, 小学校からは消え, 中学校第1学年の「書くこと」の言語活動例に新設された。

次に示すのは, 『小学校学習指導要領』(平成20年3月)の, 国語科「B 書くこと, 第5学年及び第6学年, 言語活動例 ア」である。

経験したこと, 想像したことなどを基に, 詩や短歌, 俳句をつくったり, 物語や随筆などを書いたりすること。

この言語活動例については, 『小学校学習指導要領解説国語編(平成20年6月)』において, 次のように述べられている。

随筆は, 身近に起こったこと, 見たことや聞いたこと, 経験したことなどを他の人にも分かるように描写した上で, 感想や感慨, 自分にとっての意味などをまとめたものである。随筆を書くことで, 出来事や経験などをきっかけに, 自分自身がもっているものの見方や考え方, 生き方などを見つめ直したり深めたりすることができる。そのために, 考えるきっかけになった出来事や経験などを体験的にまとめて書くことが必要となる。物語や詩などを書き身に付けてきた描写などの文学的な文章の表現力を生かすことになる。また, そのような出来事や経験などの事情や背景を想像したり推測したりして, 自分の考えを記述したり説明したりする必要がある, 説明や報告などを書き身に付けてきた説明的な文章の表現力なども生かすことが大切である。(p.105)

『小学校学習指導要領』(平成29年3月)の, 国語科「思考力・判断力・表現力等, B 書くこと, 第5学年及び第6学年, 言語活動例 イ」では, 以下のようなになる。

事実や経験を基に, 感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について文章に書く活動。

この言語活動例についての、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説国語編（平成 29 年 7 月）』における解説は、以下の通りである。

身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを描写しながら、感想や自分にとっての意味などをまとめて書く言語活動である。この言語活動は、中学校第 1 学年の随筆を書く言語活動につながるものである。(p.145)

第 5 学年及び第 6 学年のイ、ウは、主として文学的な文章を書く言語活動を例示している。(p.35)

平成 29 年告示では、「随筆」の語は消えたが、「経験」「を基に」「自分にとっての意味」について文章を書く、という要素は引き継がれ、「随筆」は中学校の言語活動例に移る。「短歌や俳句をつくる」言語活動例は、書くことのイに移動した。

本稿では、この変化を観点にして、平成 20 年告示と平成 29 年告示の学習指導要領のもとで作成された国語教科書における「随筆を書く」「『自分にとっての意味』を書く」教材を検討する。

2 対象資料

平成 20 年版の学習指導要領下で作成された小学校国語教科書としては、平成 26 年 3 月検定（平成 27 年度より令和元年度まで使用）の、いわば最終版（最新版）を、平成 29 年版の学習指導要領下で作成された国語教科書としては、平成 31 年 2 月検定（令和 2 年度より使用）のものを検討の対象とする。

なお、平成 31 年 2 月検定版の発行を取りやめた三省堂版については、学習指導要領改訂による変化を見ることができないため、変化の検討の対象からは除外したが、「随筆の定義」の項では引用している。

中学校国語教科書は、平成 29 年版の学習指導要領下で作成された、令和 2 年 2 月検定（令和 3 年度より使用）のものを検討の対象とする。

検討の対象とした国語教科書は、以下の通りである。（配列は出版社番号順）

小学校

平成 26 年 3 月 5 日検定済（本稿では「旧版」と呼んだ。平成 27 年度使用開始）

東京書籍『新編 新しい国語 六』
学校図書『みんなと学ぶ小学校国語 五年上』
三省堂『小学生の国語 六年』
教育出版『ひろがる言葉 小学国語 6 上』
光村図書『国語 六 創造』

平成 31 年 2 月 25 日検定済（本稿では「新版」と呼んだ。令和 2 年度使用開始）

東京書籍『新しい国語 六』
学校図書『みんなと学ぶ小学校国語 六年下』
教育出版『ひろがる言葉 小学国語 六上』
光村図書『国語 六 創造』

中学校

令和 2 年 2 月 20 日検定済（令和 3 年度使用開始）

東京書籍『新しい国語 1』
三省堂『現代の国語 1』
教育出版『伝え合う言葉 中学国語 1』
光村図書『国語 1』

3 小学校教材の変化

東京書籍（『新編 新しい国語』）旧版は、6年に「ずい筆を書こう」を置き、「体験した出来事を思い出し、題材を集める」「体験した出来事と今の自分の考えを整理して書く」の二点を目標として示している。完成された文章のほか、構想メモ・構成メモも提示されている。例文としては、「今度はわたしが」（自分が一年生のころ六年生と話した思い出）を掲載している。「言葉の力・ずい筆を書く」は、「自分の体験した、印象に残っている出来事を思い出し、題材を集める」「体験した出来事の様子が読み手に伝わるように、くわしく書く」「体験した出来事をふり返り、今の自分がその出来事をどのようにとらえているかを書く」の三点である（p.31）。

新版（『新しい国語』）は、6年に「『卒業文集』を作ろう」が設定され、冒頭で「六年間をふり返り、心に残っている経験や、その経験から自分が学んだことを、友達や下級生、今までお世話になった人に伝える文章を書きましょう」と述べている。こちらでも、完成された文章のほか、構成メモも提示されている。例文としては、「一年生と私」（一年生をむかえる会に関する、一年生のときの温かい思い出と、六年生のときの苦い思い出）が掲載されている。「言葉の力・思いを伝える文章を書く」は、「自分が伝えたい思いを明確にする」「読み手の興味を引くよう、話題の提示の仕方をくふうする」「思いを持つきっかけとなった出来事について、そのとき経験したこと、感じたことや考えたことをくわしく書く」「伝えたい思いを、自分の経験と関連付けて書く」の四点である（p.237）。

光村図書（『国語』）旧版は、6年に「随筆を書こう 忘れられない言葉」を置いている。随筆の例として、中川李枝子「ふわふわの雪」を掲載し、「たいせつ・随筆を書く」は、「出来事などの事実と、思いや考えなどを、どのように書き表すか工夫する」「経験したことなどが、自分にとってどのような意味をもったのかを書く」の二点（p.195）、「ふりかえろう」は、「随筆を書くことで、自分自身のどんな一面を新たに発見しましたか」「読む人によりよく伝わるように、どのような表現の工夫をしましたか」の二点が示されている（p.195）。例文としては、「明日の私は新しい」（児童が書いた設定）を全文掲載している。

新版は、6年に「書き表し方を工夫して、経験と考えを伝えよう 大切にしたい言葉」を設定している。テーマは「座右の銘にしたい言葉」、推敲に重点を置き、具体例を示して詳しく説明している。「たいせつ・考えたことや感じたことを伝える」は、「自分の経験と、そのときの自分の気持ちが伝わるように、くわしく書く」とよいところはどこか考える、「自分が考えたことや、感じたことにふさわしい言葉を選んで書く」の二点である（p.180）。「いかそう」では、「経験をもとに何かを伝えるときには、経験と伝えたいことの結び付きを考えて、言葉を選びましょう」としている（p.180）。

学校図書（『みんなと学ぶ小学校国語』）旧版では、5年上巻に「随筆を書こう わたし風『枕草子』」を置き、「春はあけぼの」の原文と現代語訳を掲載した後、「四季のうちで、自分がいちばん好きな季節と、具体的な時間と場所」を書いたメモと文章を二例ずつ挙げている。

新版では、6年下巻に「今の気持ちを書き残そう 自分を見つめてみよう」を設定し、目標として「見方や考え方を働かせて、自分が考えていることや、それが自分にとってどんな意味をもつか、書きましょう」を挙げている。冒頭では、「小学校卒業まであとわずかとなりました。みなさんは数年後、どのような考えをもち、どのように過ごしているでしょうか。今、考えていることや感じていること、あなたの周りの人やものがどんな意味をもつのかなど、自由な形式で書いてみましょう。書いてみると、今の自分の見方や考え方を再発見できるかもしれません（p.70）」と述べられている。導入「書き方を確かめよう」で、村田沙耶香氏の「いつか、あの綿毛から花を」を掲載し、「友達のはげましで」「十年後の自分へ」の二つの例文を提示している。

東京書籍、光村図書、学校図書の三社は、新版では「随筆」の語は外し、新しい教材を設定している。東京書籍と光村図書は、例文のテーマには、旧版と新版の関連（継続性）がみられる（東京書籍は一年生のころの経験、光村図書は言葉）。

学校図書の旧版は、学習者の経験やその振り返りの要素は薄く、他社とは異なり、特徴的である。新版は、旧版とは全く異なる教材になっている。「卒業」と関わらせて経験や自分にとっての意味を見つめさせようとするところは東京書籍と共通している。

一方、新版でも随筆の語や、随筆を書く学習を継続したのが、教育出版『ひろがる言葉 小学国語』である。

旧版6年上では、第一単元を、「随筆を読んで、経験をもとにして書こう」（自分の経験や考えと比べながら読みましょう）とし、「薫風」（黛まどか）、「『迷う』」（日高敏隆）の二教材を置き、続けて、「筆者の思いを考える」「自分の経験に感想や考えを加え、二百字程度にまとめる」学習が設定されている。

「ここが大事・随筆を読む」では、以下のように述べられている。

随筆とは、筆者がある物事やできごとなどをとおして、自分のものの見方、感じ方、考え方を自由に書いた文章です。／ですから、まず、どのような事柄を取り上げているかをしっかりつかむことが必要です。次に、筆者ならではの個性的なもののとらえ方や表現について気をつけて読みましょう。／さらに、筆者が取り上げた事柄に対して、自分ならどう感じるか、どう思うかなどと考えながら読むことが大切です。／そうした読み方は、自分で随筆を書くときにも役立ちます。（p.29、／は改行を示す）

この第一単元を経て、同じ6年上の第七単元が「随筆を書こう（自分のものの見方や考え方を深めよう）」になっている。冒頭で「随筆とは、筆者が、ある物事やできごとをとおして自分のものの見方や感じ方、考え方を見つめて書いた文章です。随筆を書くことは、自分自身のものの見方や感じ方、考え方に改めて気づいたり、深めたりすることにもつながります。みなさんも、随筆を書いてみましょう（p.104）」と述べ、「小さなことでもよいので、特に印象に残っていることを選びましょう」として、「感動したこと、発見したこと…」などの観点を挙げている。例文としては、「言葉のかんちがい」が示されている。

別単元（先行単元）の随筆を読むこと、短い文章を書いてみることと関連させているのが他社にはない特徴である。「随筆の題材」として「随筆は、自分が体験したことから題材を選ぶことが大切です。しかし、それは、特別な事柄に限りません。日常のなにげないできごとでも、見方やとらえ方によっては、とてもよい題材となります。」（p.105）と述べられている。「ふり返り」は、「自分とはちがったものの見方や考え方に気づくことができましたか」「読み手に考えが伝わるように、表現を工夫して書けましたか」の二点である。

教育出版（『ひろがる言葉 小学国語』）の新版6年上は、第一単元を「筆者のものの見方や感じ方などにふれ、随筆に親しもう」とし、「春はあけぼの」「薫風」「『迷う』」「随筆を書こう」で構成している。

旧版の第二単元（随筆を読む）と第七単元（随筆を書く）を同一単元内で連続させ、冒頭に伝統的な言語文化にあたる教材を置いている。この「春はあけぼの」の結びに、「『私の枕草子』を書こう」を置き、「言葉マップ」を用いた連想、構想を経て、例文では百字程度の文章を書く活動が設定されている。

その後、旧版にもあった「薫風」「『迷う』」を置き、「随筆を書こう」が設定されている。テーマ例や例文（「グラウンドの風」中略あり）は、旧版から一部が変更されている。「ここが大事・随筆を書く」は、「一つのテーマに対して、一般的な意味だけでなく、自分なりの考えを述べる」「体験や事例を通して考えたことや、自分のにんしきが変わったことを書く」の二点が示されている（p.45）。「ふり返ろう」は、「自分のものの見方や感じ方、考え方を見つめ、読む人に伝わるように、随筆を書くことができましたか」とある。

学習指導要領には明記されなくなった「随筆」の語を残し、旧版では離れて設定されていた、随筆を読むことと書くことの単元を一つにまとめて連続させたこと、さらに伝統的な言語文化の教材も加えたことは、他の三社とは異なる独自の改訂といえる。

4 中学校教材

『中学校学習指導要領』（平成29年3月）の国語科「B 書くこと、第1学年、言語活動例 ウ」は、「詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動」である。

小学校と中学校両方の国語教科書を発行している東京書籍、光村図書、教育出版の、中学校1年生に新たに設定された随筆を書く教材には、旧版の小学校と明らかに類似している点は見られなかった。この点は、旧版のみ小学校教科書を発行していた三省堂の中学校国語教科書も同様である。

東京書籍（『新しい国語 1』）は、「心に残る出来事を表現しよう 日常生活から生まれる随筆」を設定し、「日常生活のなかから題材を決め、伝えたい出来事と意思を明確にする」「出来事と意思がよく伝わるように、表現を工夫して随筆を書く」の二点を目標として挙げている。「随筆の例」（「しか」の呪文）を用いて「随筆を書くためのポイント」を発見するところから始め、「完成作品例」としては「チョークとK君」が

示されている。全部で6ページの教材である。

光村図書（『国語 1』）は、読むことの教材として工藤直子「随筆二編（空、えんぼう）」を置いた直後に、「構成や描写を工夫して書こう 体験を基に随筆を書く」を設定している。目標は「情景や心情を適切に表す語句を選ぶ」「書く内容の中心が明確になるように、構成や描写を考えて書く」の二点である。4ページが当てられている。

東京書籍、光村図書の両者は、小学校の旧版と比較すると、学習事項や例示が増加しており、小中の段階の異なりを示すものとなっている。

これに対して教育出版（『伝え合う言葉 中学国語 1』）は1ページで、芥川龍之介「漱石山房の秋」を上段に示し、下段で随筆を書く手順を文章で説明している。「書くこと」学習の中でも「推敲」に重点を置いたものであることがマークで示されている。割かれた分量（ページ数）の点で、他の二社とは、はっきりとした異なりを見せている。

中学校のみの発行となった、三省堂（『現代の国語 1』）は、「体験に向き合い意味づける」を設定し、「日常生活の体験の中から題材を決め、表現したいことの中心を明確にしてまとめる」「交流をとおして、表現のよい点や改善点を見つける」の二点を目標として挙げている。例文としては、「夏の音」を挙げている。全部で4ページの教材である。

5 随筆の定義

『小学校学習指導要領解説国語編（平成20年6月）』では、「随筆」を次のように定義していた。

随筆は、身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを他の人にも分かるように描写した上で、感想や感慨、自分にとっての意味などをまとめたものである。

小学校教科書（旧版）の、随筆の定義（随筆とはどのような文章のことか）に関する記述を列举すると、以下のようである。

〔光村図書〕自分が経験したことや、見たり聞いたりしたことの中から、忘れられないような印象深いことを取り上げ、それについて自分の思いや考えを書くことがあります。このような文章を、「随筆」といいます。（小6・p.190）

〔東京書籍〕体験した出来事を通して自分が感じたことや考えたことをまとめた文章を、ずい筆といいます。ずい筆には、出来事などに対する書き手の感じ方や考え方が表れます。（小6・p.28）

〔学校図書〕見たり聞いたりしたことをもとに、考えたり感じたりしたことを自由な形式で書いた文章。エッセイ。▼日本最古の随筆に、清少納言の「枕草子」があります。（小5上・資料編 授業で使う言葉 p.148）

〔教育出版〕随筆とは、筆者がある物事やできごとなどをとおして、自分のものの見方、感じ方、考え方を自由に書いた文章です。（小6上・p.29）

〔三省堂〕随筆とは、見たり聞いたりしたことや、心に思いうかんだことなどを、自由に書いた文章です。随筆を書くことで、自分のものの見方や考え方をみつめ直すことができるでしょう。

新版で「随筆」の語を残した教育出版では、随筆を「読むこと」教材の「ここが大事・随筆を読む」に、「随筆とは、筆者が、ある物事やできごとなどをとおして、自分のものの見方、感じ方、考え方を書いた文章です」（小6上・p.42）と述べられている。旧版の記述と比べると「自由に」が削除されている。

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成29年7月）』では、以下のように述べられている。

随筆とは、身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを描写しながら、感想や自分にとっての意味などをまとめた文章である。

これをふまえた中学校教科書（新版）の、随筆の定義（随筆とはどのような文章のことか）に関する記述を列挙すると、以下のである。

〔東京書籍〕生活の中で体験したことや見聞きしたことを描き出しながら、感じたことや考えたことをまとめた文章を、随筆という。（中1・p.199）

〔教育出版〕（教材本文から引用）随筆を書く際には、まずは身近に起こったこと、経験したこと、感動したことを思い浮かべます。／次に、その経験から自分が何を新しく発見したか、自分にとってどんな意味があるか、を考えます。（中1・p.165）

〔光村図書〕（教材本文から引用）「空」「えんぼう」（いずれも「読むこと」教材…引用者注）は、筆者が過去の体験を思い出し、それを現在の視点で捉え直して書いた随筆である。このように、体験を振り返り、自分にとっての意味を考えて、随筆を書いてみよう。（中1・p.220）

〔三省堂〕体験に伴う感覚や思考、体験の意味などを自由にまとめた文章。（中1・p.88）

『国語教育研究大辞典』では、「随筆」、「随筆（作文教材）」、「随筆教材」の三つの項目が立てられている。第一の「随筆」には、「『随筆』の一般的な定義はかなり漠然としている（p.534）」とある。「随筆（作文教材）」では、「経験・見聞・感想などを、筆にまかせて、何くれとなく書いた文章。多くは、筆者の身近な事項に題材を求め、それに対する筆者のものの見方、考え方を率直な心情のもとに書いた、広く言えば感想文の一つである（p.536）」とあり、これは学習指導要領解説の定義に近い。「随筆教材」でも、「形式の面からいえば、詩歌・物語小説・戯曲などに比べると、明白な形式・組織や、構成意識を持たず、形式にとらわれない文章である」とある。学習指導要領の解説は、「書くこと」領域の随筆についての解説であり、「読むこと」領域の随筆あるいは一般的な随筆の定義（定義できず漠然としているという指摘も含め）を、あえて限定したものであるといえる。『中学校学習指導要領』（平成29年3月）の「読むこと」第1学年の言語活動例イは「小説や随筆などを読み、考えたことなどを記録したり伝え合ったりする活動」である。この箇所の解説は、「小説では登場人物の心情などが、随筆では人間や自然などについての書き手の考えなどが、様々な描写を用いて豊かに表現されている（p.72）」と述べられるにとどまっている。

一般的な、あるいは「読むこと」教材として随筆の定義は広い。一方、の「随筆を書く」教材で示される作品例としての随筆（生徒作品以外のもの）は、「書くこと」の解説（定義）に近いものが選ばれている。具体的には、自分（書き手）の経験・体験を題材とするものに絞られやすい、ということである。「読むこと」学習で随筆を対象とする際との差異に留意する必要があるだろう。

6 「自分にとっての意味」を書く

小学校・中学校の「書くこと」領域の言語活動例で、「感じたこと」を書くものを挙げると、以下のである。

簡単な物語を作るなど、感じたことや想像したことを書く活動。（小1-2, ウ）

詩や物語をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動。（小3-4, ウ）

事実や経験を基に、感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について文章に書く活動。（小5-6, ウ）

詩を創作したり随筆を書いたりするなど、感じたことや考えたことを書く活動。（中1, ウ）

短歌や俳句、物語を創作するなど、感じたことや想像したことを書く活動。（中2, ウ）

中学校第2学年の該当箇所の解説では、以下のように述べられている（下線は引用者）。

短歌や俳句、物語を創作する際には、題材をどう捉えるか、どのような言葉を使って描写するかなどに、書き手のものの見方や感性が表れるものである。特に、短歌や俳句の創作では、限られた音数の中でどのように描写するかを考え、様々な言葉や表現を工夫することが必要となる。

また、物語を創作する際には、登場人物や場面、状況等を設定し、発端から結末までの展開を考えて書くことのほかに、それまでに読んだことのある物語の構成や展開を参考に書くこと、与えられた設定の中で展開を膨らませて書くこと、自分の経験を基に書くことなどが考えられる。(p.96)

中学校第1学年の「随筆」が含まれる、「創作」の言語活動例の系列では、文学（作品）としての形式や要件を意識するだけではなく、自己を見つめ表現することが意図されているといえる。このことは「書くこと」の重要な機能の一つといえよう。

「自分にとっての意味について文章に書く」という小学校5-6学年の趣旨は、この創作系列の言語活動に共通していると考えられる。随筆を書く活動もその一つであること、他の創作活動も、自己を見つめることに重要な意義の一つがあることを意識しておきたい。

7 結語

旧版、新版の両方を発行した出版社の小学校国語教科書（4社）のうち、3社は「随筆を書く」単元を取りやめ、「感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味について文章に書く活動」を新設した。1社（教育出版）は、「随筆を書く」学習活動を、内容は更新して継続させた。

あらためて「書くこと」の言語活動例の記述を見ると、第5学年及び第6学年を例にとれば、「ア、考えたことや伝えたいこと」「イ、感じたことや想像したこと」「ウ、感じたり考えたりしたことや自分にとっての意味」とあるように、文種ではなく書き手（学習者）の認識や思考の側に立って設定されていることが分かる。「随筆」という文種よりも、「自分にとっての意味について文章に書く」ことが重視されたからこそ、言語活動例の改訂といえよう。中学校第1学年に随筆が移行したように、文種や媒体が完全に消えたわけではないが、文種の要件を満たした文章を書くことが目的ではないことは明らかであろう。

随筆は定義することが困難な文種である。「書くこと」の学習のために題材や形式等を限定したとしても、「読むこと」教材としてはもっと多様な随筆教材を用いる必要がある。そしてここでも、随筆という文種が問題なのではなく、随筆を読むことによって見えてくるもの、学習者自身に喚起されることが重要であることはいままでもない。その点が「書くこと」の学習活動へと自然に接続することにも期待したい。

「書くこと」の学習活動や文種は決して実用的なものに偏っているわけではない。書くことによる自己省察の機能が発揮され、作品を完成させることのみが目的ではない学習の創出が求められる。

文献

- 『小学校学習指導要領』（平成20年3月告示，文部科学省，2008年）
- 『小学校学習指導要領解説国語編（平成20年6月）』（文部科学省，2008年）
- 『中学校学習指導要領』（平成20年3月告示，文部科学省，2008年）
- 『中学校学習指導要領解説国語編（平成20年9月）』（文部科学省，2008年）
- 『小学校学習指導要領』（平成29年3月告示，文部科学省，2017年）
- 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成29年7月）』（文部科学省，2017年）
- 『中学校学習指導要領』（平成29年3月告示，文部科学省，2017年）
- 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編（平成29年7月）』（文部科学省，2017年）

橋浦兵一「随筆」（国語教育研究所編『国語教育研究大辞典 普及版』明治図書，1991年，pp.534-536）
矢口龍彦「随筆（作文教材）」（国語教育研究所編『国語教育研究大辞典 普及版』 pp.536-537）
浮橋康彦「随筆教材」（国語教育研究所編『国語教育研究大辞典 普及版』 pp.537-538）

・引用にあたって、記号、レイアウト等をあらためたところがある。

